

# フランス（ベルヴェ）における イザドラ・ダンカンの「芸術アカデミー」

——創設から閉鎖まで——

柳下 恵美

## はじめに

モダンダンスの創始者イザドラ・ダンカン<sup>(1)</sup>は、50年という短い生涯において自身の舞踊精神の基にドイツ（グリューネヴァルト<sup>(1)</sup>）、フランス（ベルヴェ）、ロシア（モスクワ<sup>(2)</sup>）に無償の寄宿学校を創設した。なかでも1914年に創設されたフランスの学校は、生徒と芸術家たちの交流が活発に行われたイザドラの「芸術アカデミー<sup>(3)</sup>」としての夢の実現の場であった。しかし、第一次世界大戦の勃発を機に、学校はわずか半年足らずで閉鎖となってしまったことからこの学校の全容は殆ど知られていない。

これまでフランスの学校について記述されているものとしては、リリアン・ローウェンサル<sup>(4)</sup>、オデット・アラード<sup>(5)</sup>の著書が挙げられるが、学校の内実に至るまでの詳細な記述はなされていない。そこで本稿は、イザドラ・ダンカンが夢を抱いて創設したベルヴェの学校に焦点をあて、学校創設から閉鎖までの経緯を明らかにするとともに、そこでどのように舞踊教育が行われ、訪問した芸術家・文化人と生徒たちの交流がいかなるものであったのか、先行研究で使用されていない諸史料、すなわち当時の新聞記事、雑誌、公演プログラム、フランス国立科学研究センターが刊行した建物の歴史に関する冊子、ロダン美術館アーカイヴ、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の図書館にある一次史料を基に明らかにする。

## 1 ベルヴェの学校創設までの経緯

イザドラ・ダンカンは、1908年にドイツの学校閉鎖後パリに居を構え、世界各地で公演活動を精力的に行った。しかし1913年、ベルリン公演を終えパリに帰国したイザドラは、自身の幼子パトリックとデアドリーが乗っていた車共々セヌ川に落ちて亡くなるという突然の悲劇に襲われる。それ以降、公演や創作活動が

停止状態となったことから、2人の子供を同時に失ったイザドラの悲しみは想像を絶するものであったに違いない。この状況を打破するため、パトリックの父親であったパリス・シンガー<sup>(6)</sup>は、子供たちへの教育に目を向けるよう彼女にパリ郊外のベルヴェにある62の部屋<sup>(7)</sup>からなるパイヤール・ホテル<sup>(8)</sup>を舞踊学校として買い与えた<sup>(9)</sup>。



図1. パイヤール・ホテルの外観

フランス国立科学研究センターの史料<sup>(10)</sup>によると、シンガーが購入したパイヤール・ホテル<sup>(11)</sup>は、9,240㎡の領地と建物が800,000フラン、家具が200,000フランで、計1,000,000フランという<sup>(12)</sup>大変高価な贈り物であった。自らの舞踊学校を創設するという目標を得たイザドラは、再び元気を取り戻し、あらゆる社会的身分の子供たちが入学できるように配慮すると同時に内装等の詳細についても関わるようになった。

寄宿制の舞踊学校で再び子供たちを教育することは、2人の子供を失い悲嘆にくれていたイザドラの癒しに繋がった。それは「この人生がもたらした悲しみと破滅にどんなに苦しみにさいなまれても、学校を造りたいという私の思いだけは、少しも汚されずにつねに光を放っていた<sup>(13)</sup>」という自伝に書かれた言葉からも読み取ることができる。

## 2 学校内部の造り

パイヤール・ホテルは、パリのモンパルナス駅から約15分という比較的パリ市内から近いベルヴェの丘に建っており、建物の内部は大きなレストラン、大広間、2階へと続く大階段、そしてルイ16世調の部屋などがあり、セヌ川が見下ろせる景色のよい場所に位置していた。

自伝によると、イザドラは装飾や家具などの職人を指揮し<sup>(14)</sup>、ホテル内にあった「ボンパドゥール<sup>(15)</sup>」と呼ばれていた大きなレストランをダンススタジオに

変え「青の間」と名づけている。そしてこの広い部屋に身体の動きがチェックできる大きな鏡を置き<sup>(16)</sup>、特に好んだブルーのカーテンをかけて熟慮する際にこの部屋を使用していた。縦に約40mほどある部屋は、ドアから遠ざかったところに休憩用の長椅子や腰掛け椅子が置かれ、空いたスペースは訪問客のために使用された。この部屋は主に身体訓練やダンスのためのスタジオとして使われていたが、イザドラはここで訪問客の接待もしていたようである<sup>(17)</sup>。



図2. 改装前のレストラン  
「ポンパドゥール」



図3. 改装後のダンススタジオ「青の間」

イザドラは学校内部の様子を次のように回想している。

ダンス室はホテルの食堂だったところで、私の青いカーテンを壁につるし、長い部屋の中央に階段付きの教壇を造った。これは見学者のためのものであると同時に、自分の考え出したダンスを踊ってみたい人が使うためのものでもあった。学校の生活が単調で退屈なのは、一つには床が全部同じ高さにあるせいだと私は考えた。だから部屋と部屋との間に、片方から上がってもう片方で下るようにした通路を造った<sup>(18)</sup>。



図4. 階段を降りたところでくつろぐ  
6人の愛弟子「イザドラブルズ」

もう一方の側には、白いモスリンが床から天井まで掛けられている正方形の「白の間」と呼ばれるダンススタジオを設け、壁にはパンテオンのフリーズの破片の複製が飾られた。その他にも崇高なダンサーの彫刻やタナグラ・フィギュア、ギリシアの彫刻等を設置した。とくに下記図5、6の中央に置かれている「踊るマイナデス<sup>(19)</sup>」の彫刻はイザドラが最も崇めた彫刻の1つであった。



図5. 「白の間」に通じる階段



図6. 「踊るマイナデス」の像を眺めているイザドラとイザドラブルズ

イザドラは、このように学校内に彫刻を置くことで、生徒たちが自発的に美しい身体の動きに関心を寄せ、感性を高めることを促していたのであろう。これら2つのダンススタジオの他には1階には食堂があり、テーブルの上にはいつも沢山の花が生けられていた。自伝には「食堂はロンドンのイギリス下院の議場風にしつらえ、両側に向かって椅子の席がだんだん高く並んでいた。年長の生徒と教師は上段の席に座り、子供たちは下段に座ることにした<sup>(20)</sup>」と記されている。図7はその食堂の様子である。



図7. 1階の食堂で談話するイザドラブルズ

2階には生徒たちの部屋、イザドラの部屋そして勉強部屋と美しい図書室を設け、図書室にはイザドラが尊敬しているオーギュスト・ロダンやウジェーヌ・カリエールにちなみ「ロダンの間」、「カリエールの間」と呼ぶ部屋を造った<sup>(21)</sup>。図書室は三つの部屋のドアを取り払って造られた細長い部屋であったが、ガラスの戸棚には多くの本が収められ、壁にはシステーナ礼拝堂にある『最後の審判』の絵やカリエールの作品もいくつか掛けられた。生徒たちの部屋は簡素なものであったが、部屋の装飾は舞踊を芸術として高めるための一助になるというイザドラの考えの下に、壁にはギリシアの彫刻やボッティチェリの絵が飾られた。芝で覆われた屋上のテラスからは美しいパリの光景が見下ろせ、学校の建物の周りには生徒たちが自由に駆け回れる素晴らしい庭があった。正面の扉の前にも大きな芝があり、もともとホテルという豪華な建物であったところに、イザドラの芸術的センスがふんだんに取り入れられた贅沢な舞踊学校であった。またこの建物の別翼に、300人程収容可能な踊りを鑑賞できる劇場を翌春には完成させるという計画もあった<sup>(22)</sup>。イザドラはこの劇場計画について、次のような言葉を述べている。

ローエングリン<sup>(23)</sup>はベルヴュの丘に、ずっと長い間中断されていた劇場を建設する可能性を探り始めた。しかも、それを祭りの日にパリの人々がやってくる祝祭劇場にして、専属のオーケストラまで作る計画を立てた。再びローエングリンは建築家のルイ・スーを呼び、一度放棄された劇場模型がもう一度、図書室に作られた。そして、すでに基礎の区画も定められた。この劇場で、私は音楽と悲劇と踊りをその最も純粋な形で一つに合わせるという夢を実現したかった。ここでムネ・シュリ、エレオノーラ・ドゥーゼ、スザンヌ・デュブレなどが「オイディプス」や「アンティゴネ」、または「エレクトラ」を演じ、私の学校の生徒がその合唱<sup>(24)</sup>を踊るのが、私の夢だった。また、この劇場で『第九交響曲』と千人の私たちの生徒達で、ベートーヴェンの百年祭も祝いたかった。そして子供たちが丘を下り、船で川を渡り、パンテオンまで聖なる行進を続けて、そこで偉大な政治家や英雄を記念して祝う日を思い描いていた<sup>(25)</sup>。

しかしこのイザドラのもう一つの壮大な夢であった劇場創設という計画は、戦争勃発により残念ながら実現されることはなかった。

### 3 生徒の選抜と入学者の年齢制限

ベルヴュの学校の開校日は1914年2月21日<sup>(26)</sup>であったが、開校以前の生徒の選抜方法の詳細については不明瞭な点が多い。自伝ではパリ中心部で行われたコンクールで選ばれた新しい生徒50人と前の学校の生徒と教師たちが集まってき

た<sup>(27)</sup>と語っていることから、おそらく開校前の1月か2月には50人を選抜していたのではないかと推測される。

生徒は授業料、生活費などは全て無料で、新鮮な空気と整った環境で健康的な生活を送ることができた。入学対象者は、ドイツの学校では10歳以下の少女のみとなっていたが、ベルヴェの学校では男子生徒も少数入学しており、生徒たちの国籍もイギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、ロシアと様々であった<sup>(28)</sup>。

イギリス、アメリカ、ドイツからどのように生徒を集めたかについては不明な点があるが、ロシアの生徒に関しては、イザドラの愛弟子アナの証言から次のことが分かった。それによると、アナとイルマをサンクトペテルブルクに送り、現地で踊りを披露させて学校への入学を勧めたようである<sup>(29)</sup>。実際、筆者がモスクワの文書館でイザドラの学校の生徒2人が1914年4月にロシアで公演することを告知する史料<sup>(30)</sup>を閲覧していることから、このことは裏付けられる。アナはロシア政府が非常に親切<sup>(31)</sup>であったことも付け加え、最終的に6人のロシア人の子供を選抜したようである<sup>(32)</sup>。

年齢制限については、各新聞社の掲載記事の情報が錯綜している。例えば1914年3月7日のラクシオン紙には、入学者の対象は8歳以下で、25人の男の子と25人の女の子を希望、この生徒たちが21歳になるまで教育したいと掲載されている<sup>(33)</sup>。しかし、3月19日掲載のワシントン・ポスト紙は、入学対象者を8歳かそれ以上の子供たち（男子、女子）を入学対象としており<sup>(34)</sup>、その後6月26日のデイリー・メール紙は、入学対象の年齢は5歳から9歳で生徒たちが18歳になるまで教育したいというイザドラの意思が記述されている<sup>(35)</sup>。これらの新聞記事から、生徒たちの入学から卒業までの年齢についての構想はかなり曖昧であり、一貫性がないことがわかる。これは開校を急ぐあまり十分な構想を練る時間がなかったためと思われる。

## 4 学校での教育

ベルヴェの学校ではどのような教育が行われていたのであろうか。当時の新聞記事や雑誌等の史料から詳細を考察していきたい。ル・タン紙によると、生徒たちの1日は9時に起床すると色のついた服を着てサンダルを履き、建物や庭を出入りし時間が許す限り隣の林を散歩することから始まる。10時頃には着替えをして大きなダンス室で踊り、午後は一般教養を身に付ける授業を受講、17時からはいざドラや愛弟子のイザドラブルズたちと共に大きなダンス室でお茶の時間となった。この時間には必ず訪問者やイザドラの友人がおり、生徒たちはこのゲストのために踊りを披露している<sup>(36)</sup>。一方、ワシントン・ヘラルド紙に掲載され



た学校の簡単なタイムテーブルの概要は以下の通りであった<sup>(37)</sup>。

①朝

- ・ 7時30分 起床
- ・ シャワー
- ・ 歌、呼吸の訓練
- ・ 朝食（牛乳、フルーツ、シリアル）
- ・ 一般教育（昼まで）

②午後

- ・ 昼食
- ・ 遊び、柔軟体操
- ・ 昼寝

③夕方

- ・ 17時～ダンスのクラス

夕方17時からダンスのクラスという点は両紙とも一致しているが、起床時間、一般教育の時間帯は異なっている。ル・タン紙が午前中にダンスのクラスがあるとしていることから、訪問客のあるときには午前中もダンスのクラスを組み込むことで変則的なスケジュールを行うなど、多少の修正をしていたのではないだろうか。

いずれにせよ17時からが主たるダンスのクラスであったことは確かであり、その現場には芸術家たちが居合わせ、彼らを楽しませていたことが推察される。この点については次節でも述べるが、ロダンをはじめ訪問客である芸術家は、単に生徒たちの踊りを鑑賞するだけでなく、スケッチや習作を行っていた。ここでは、芸術家と生徒は見る者、見られる者の関係に留まらず、芸術家は生徒に芸術における重要な事柄を伝え、生徒は芸術家から直に学べる機会を得ていた。イザドラは学校での生活を次のように記述している。

この忙しい生活のなかで、私はもう一度教える勇気を発見し、また、生徒たちは信じられないほどの早さで学んでいった。開校から三ヶ月たつと、生徒たちは彼らを見にやってくる芸術家たちの驚嘆と称賛の的となるまでに進歩をとげた<sup>(38)</sup>。〔中略〕私は毎日、何時間も生徒を教え、疲れて立っていられなくなると長椅子にもたれて、手や腕だけを動かして教えた。私の教授力はほとんど神業に近くなっていた。私が手を子供たちのほうに差し伸べるだけで、彼らは踊った。それはまるで、私がダンスを彼らに教えるというよりは、ダンスの精気が子供たちに流れてゆく道を私が開いてゆくかのようなだった<sup>(39)</sup>。

図8の写真はダンスの授業の風景である。愛弟子たちは子供たち一人一人についており<sup>(40)</sup>、イザドラは後方で座りながらその様子を見て指導している。

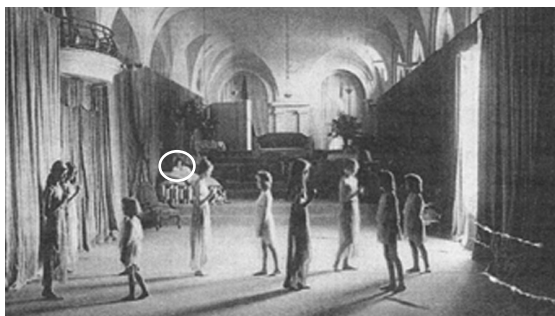


図8. 子供たちをマンツーマンで教えている愛弟子たち  
(白丸内は座わりながらクラスを指導しているイザ  
ドラ：白丸は筆者によるもの)

この時、イザドラが座って指導しているのは第3子<sup>(41)</sup>を妊娠しており、長時間立って教えるのが辛い状況になっていたからであろう。しかし、芸術家や文化人を招くことで、自らも含め生徒たちとの交流を盛んにさせていたことに誇りを持っていたのではないだろうか。自伝でも紀元100年頃、ローマのある丘にあった「ローマの舞踊神官団の教育施設」について、「少年たちの踊るダンスが薬のように見物人を元気づけた。私が学校を作ったときに夢見たのは、まさにこうした学校であった<sup>(42)</sup>」とベルヴュの学校を「ローマの舞踊神官団の教育施設」と重ね合わせて、パリの街とそこに住む芸術家たちが生き生きと輝くことを願っていた。

## 5 芸術家・文化人との交流

舞踊学校の最も特徴的な点は、著名な芸術家、文化人が訪れ、イザドラや生徒たちとの交流が盛んであったことである。とくに、ベルヴュの近くに住んでいた彫刻家のロダンをはじめ、画家のジョルジュ・バルビエ、のちに著名な映画監督となるプレストン・スタージェス他、多くの人物がこの学校を度々訪れ、訪問の際にはサインをしていた。なかでもロダンは、頻繁に学校を訪問し、3日間宿泊したこともあった<sup>(43)</sup>。その他にも画家ウジェーヌ・カリエールとモーリス・ドニ<sup>(44)</sup>、女優のエレオノーラ・ドゥーゼとセシル・ソレル、作家アナトール・フランス、劇作家エドモン・ロスタン、哲学者アンリ・ベルクソン<sup>(45)</sup>、俳優ムネ・シュリ、詩人ガブリエル・ダヌンツィオ、ヴァイオリニストのウジェーヌ＝オーギュスト・イザイ等の芸術家たち、ナポリの女王、ロシアの王子、英国の皇室、ジャック・トゥボー、内閣大臣、大使たちなどパリの上流社会の人たちやエコー



ル・デ・ボザールの生徒たち<sup>(46)</sup>が訪問していた。これはイザドラの理想とした「芸術アカデミー」の実現の始まりであった。

カリフォルニア大学ロサンゼルス校でこの学校の訪問帳を閲覧した筆者は、彫刻家ロダン、セシル・ソレル、ジョルジュ・バルビエ、プレストン・スタージェス、ガブリエル・ダヌンツィオのサインを確認した<sup>(47)</sup>。訪問帳には1914年2月17日、2月23日と日付が記載されていたことから、開校の直前・直後に署名されたものと推測される。

1914年6月にイザドラのベルヴュの学校を訪問しているイザドラの友人マリー＝ファントン・ロバートによると、当時これら著名人たちは皆、学校訪問の機会獲得に努力をしており<sup>(48)</sup>、この学校を訪問すること自体がある種のステータスになっていたようである。イザドラ本人は、この学校が理想とする「芸術アカデミー」になることを望んでいたため<sup>(49)</sup>、生徒たちが幼少期から本物の芸術家・文化人と接する機会があることを大変喜んでいた。

訪問した芸術家・文化人の中でも特に画家たちは、イザドラのベルヴュの学校でギリシア風チュニクを身に纏い自然に動く生徒たちの様子を見て、自身のスケッチの時間に充てていた。つまり、ここでは、芸術家と生徒たちが相互に影響し合える環境が整っていたのである。また、時には訪問客たちを招いて公演を催すなど、芸術家たちを楽しませるような場も用意されていた。実際、イザドラもこの学校が芸術家たちの集いの場になることを望んでおり<sup>(50)</sup>、金曜の午後には6人の愛弟子と幼い子供たちが「青の間」で公演を行い<sup>(51)</sup>、毎週土曜の午前中を画家、彫刻家、作家が訪問する日としていた。イザドラは、見学に訪れた芸術家たちが、彼女と意見交換し、子供たちの成長ぶりを目の当たりにすることができたら素晴らしい環境となると考えていた<sup>(52)</sup>。イザドラは自伝で次のように語っている。

毎週土曜日は芸術家の日だった。芸術家のために公開レッスンが朝の11時から13時まで行われ、その後、ローエングリンがいつもの気前のよさで、芸術家たちと子供たちのために、素晴らしい昼食を用意した。天気がいよときは食事は庭に用意され、昼食後は音楽や詩やダンスの時間となった。反対側の丘のムードンに住んでいるロダンはよくやって来た。彼はダンス室に陣取って、踊っている少女や子供たちをスケッチした。あるとき、彼は私に言った。「若い頃にこんなモデルがいたらどんなに良かっただろうか。自然と調和して動くことができるモデルがね。確かに私には美しいモデルはいたが、あなたの生徒達のように、動きの科学を理解しているモデルは1人もいなかったからね<sup>(53)</sup>」〔中略〕多くの芸術家が毎週、スケッチブックを持ってベルヴュにやって来た。すでに、この学校はインスピレーションの源であることが証明されつつあり、そこから何百というスケッチや踊る人物像が生まれていた。この学校から芸術家とモデルの間の新しい関係が生まれるかもしれないと、私は夢見ていた。ベートー

ヴェンやセザール・フランクの音楽に合わせて踊り、ギリシア悲劇の群舞<sup>(54)</sup>を舞い、シェイクスピアを暗唱する生徒たちの姿をみているうちに、モデルというものは、今までのように画家のアトリエで、じっと座っているだけの哀れで無表情な存在ではなく、命を最高に表現している生きた動く理想像となるだろうと思った<sup>(55)</sup>。

芸術家にこのような経験をもたらしことは、彼らにとって非常に有益であったに違いない。何故ならば、彼らはデッサンをするときに、静止した人物をモデルにするのが通常であったが、生徒たちの動く様子をデッサンすることは、芸術家にとってある種の訓練になったといえるからである。つまり、動いている人物を一瞬にして捉え、その残像を頭の中に焼き付けてデッサンする、あるいは、一瞬にして身体の動きの大まかな様子を捉えるという極めて特殊な技を身につける機会となっていたのではないだろうか。

## 6 ベルヴェの学校公演と同時期のダンス・フェスティバル

ベルヴェの学校は、6月にトロカデロ劇場で記念祭を催している<sup>(56)</sup>。ロダン美術館のアーカイヴとパリ・オペラ座の図書館所蔵の公演プログラムから、この記念祭の詳細が判明した。招待券の右上に「Invitation」というスタンプが押されていたことから、ロダンがイザドラから招待されていたであろうことが確認できた<sup>(57)</sup>。当時ベルヴェの学校にほど近いムードンに住んでいたロダンは、この学校に頻繁に出入りし子供たちと交流していた。イザドラとの親交も深かったことから、彼女がロダンを公演に招待するのは当然のことであろう。

プログラムによると、この公演は1914年6月26日（金）の8時45分にトロカデロのシャイヨー宮で行われている。シカゴ・デイリー・トリビューン紙はイザドラが2人の子供を自動車事故で失ったという悲劇から立ち直ることができず<sup>(58)</sup>、この公演にイザドラ自身が出演することはなかった<sup>(59)</sup>と伝えているが、この年の8月初旬に彼女は第3子の出産を控えていたため、6月末は臨月に近く踊れる状態ではなかったと考えるのが妥当であろう。この公演はイザドラの愛弟子6人とベルヴェの生徒たちのみで主に構成されていたが<sup>(60)</sup>、著名な俳優ムネ・シュリが出演し、ピエルク指揮のコロンヌ・オーケストラが音楽を担当したこともあり、大盛況であった。このとき生徒たちはどの演目を踊ったのであろうか。フランス国立図書館にあるトロカデロでの公演プログラムを閲覧したところ、オーケストラ、俳優ムネ・シュリ、歌手ナマラ・トイの名前は記載されているが、シューベルトの『マーチ』、『10のワルツ集』、『軍隊行進曲』には特定の演者の名前が記載されていないことから、おそらくこれらの曲を子供たちが踊った可能性

が高いと考えられる。イザドラ本人は、自伝に次のように記している。

6月になると私たちはトロカデロで記念祭を開いた。私は座敷に座って生徒の踊りを観た。プログラムのいくつかでは、観客は歓喜と熱狂とで立ち上がり大声で叫んだ。終わっても、彼らはずっと喝采を続けて帰ろうとしなかった。この芸術家でも踊り子でもないがしっかり訓練された子供たちに対する熱狂は、それとなく予見されていた人類の新しい動向に対する熱狂だったと思う。これはまさに、ニーチェの未来像に出てくる動きだった。「ツァラツストラ、ダンサーのツァラツストラ、光の者、彼は翼で手招きをする。すべての鳥を手招きして、まさに飛翔せんとする、喜びに満ち、軽やかな精気に満ちた者よ」これこそベートーヴェンの『第九交響曲』の未来の踊り手だった<sup>(61)</sup>。

上記の子供たちに対する熱狂という言葉から、生徒たちの公演は観客に感動を与え賞賛されていたこと、そしてイザドラはこの頃からベートーヴェンの『第九交響曲』を踊る子供たちを想像し、それに振付をしたいという意欲を持ち始めたことがわかる。イザドラは存命中、舞台上で子供たちと共に『第九交響曲』を踊ることは叶えられなかったが、このとき彼女は子供たちをニーチェが『ツァラトゥストラはかく語りき』で目指した超人を体現する「未来の踊り手」と見做していたのではないだろうか。

ベルヴュの生徒たちが公演する8日前の6月18日に、パリ16区のラヌラ・ガーデンで開催されたダンス・フェスティバルの史料がロダン美術館のアーカイヴに存在した。この史料からロイ・フラーや当時注目を集めていたダンサーが出演していたことが分かった<sup>(62)</sup>。当時ロダンはフラーとも親交があったことから、彼はこの公演も鑑賞していた可能性が高い。

フラーは1908年頃には自身の舞踊学校をロンドンで立ち上げていることから<sup>(63)</sup>、このフェスティバルに生徒たちを参加させたと考えられる。図9はフラーの生徒たちが踊っている写真であるが、ここで注目したいのは右側の写真で、芝生の上を走っている生徒たちが皆「裸足」であり、イザドラの生徒たちのスタイルと似ていることである。本来、ロイ・フラーの踊りは、非常に長い布を身体に巻き付け、様々な色に変化する照明に合わせて、多様な形態を呈示しながら踊る「サーペントイン（蛇のような）・ダンス」をその特徴としていた。しかしこのフェスティバルでのフラーの生徒たちの踊りにはその片鱗も見られず、むしろイザドラの舞踊スタイルを自己流にアレンジしているように見受けられる。これは「自然」という芸術観を重視し、イザドラを賛美していたロダんに同調したと考えられるのではないだろうか。

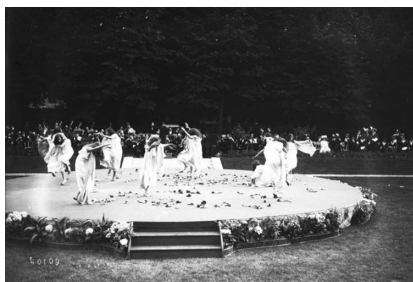


図9. フラーの生徒達の踊り

このフェスティバルにはフェッテなどの優れた技巧でパリの観客を驚嘆させていたイタリア生まれのカルロッタ・ザンベリ、アイーダ・ボニとアルバート・アヴェリンなど当時のパリ・オペラ座のエトワールが出演していた。一方、1900年代初頭にサロメなどをヨーロッパのミュージック・ホール、例えばカジノ・ド・パリやロンドンのヒポドローム、ブリュッセルのレストラン<sup>(64)</sup>などで踊っていたロシア人ダンサーのナタシャ・トゥルハノワやエキジチック・ダンサーのサハリ・ディジェリも名を連ねていた。

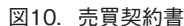
これら出演したダンサー達の踊り<sup>(65)</sup>は、技巧的、曲芸的、妖艶さを強調する傾向があり、イザドラの舞踊理念に従えば、これらはいずれも彼女の目指した舞踊とは程遠いものであったと推測できる。イザドラは当時踊っていたダンサーとは共演せず、独自の公演を各地で開催するというスタンスを貫き通しており、このようなダンス・フェスティバルに参加して踊るということはなかった。いずれにせよ、当時注目されていたダンサーが集結して踊るフェスティバルが開催された後でも、イザドラの生徒たちによるトロカデロ劇場での公演が拍手喝采で大盛況であったということは、彼女達の踊りが観客の感動を呼ぶものであったと推察できる。

## 7 学校閉鎖の経緯

順調に運営されていたフランスの学校であったが、1914年7月15日、イザドラのパリ滞在中に火災事故が発生した。このことで多くの貴重な楽譜が失われてしまうという痛手を被ったが<sup>(66)</sup>、この時学校は夏季休暇中であったため、子供たちに被害がなかったことは不幸中の幸いであった。

学校経営面の詳細な史料が現存していないため推測になるが、政府からの援助がないこの学校はおそらくパリス・シンガーの私財に頼るところが大きかった

契約書によれば、イザドラは建物と敷地の代価として、まず最初に1,000,000フランを受け取り、その後、4年間に亘って毎年100,000フランを利子なしで受け取ることで、総計1400,000フランで売却することに同意している<sup>(69)</sup>。売却日は1919年10月1日とし、その後の支払いについては、まず1920年10月1日にフランス政府から100,000フランが支払われ、1920年から1923年までの4年間で400,000フランがイザドラに支払われることになっている。



124

や負傷兵を乗せた担架を運ぶ重い足取りを聞き、多大な衝撃を受けた嘆きとして次のように記している。

ベルヴェ！私のアクロポリスよ。それは靈感の源泉であり、哲学と詩と音楽によって触発された高次の生活を学ぶ場になるはずだった。この日から芸術と調和は消え、傷ついた母の叫びと、戦いのラッパに驚いてあつという間にこの世から姿を消した子供の叫びが、周りの中から聞こえるようになったのだった。私の芸術の殿堂は殉教者の磔の地と化し、さらに血塗れた傷病兵と死者の納骨堂となってしまった。私が天上の楽を思い描いていたここには、今、苦痛の叫び声しかなかった<sup>(71)</sup>。



図11. 病院と化した学校を慰問するイザドラ  
(白丸は筆者によるもの)

## おわりに

このようにして、イザドラの夢を実現し始めた「芸術アカデミー」は約半年間で永久に消え失せ、1914年8月には閉校となってしまった。

戦争の勃発さえなければ、この学校はイザドラの理想を継続させることができたであろう。しかし、短期間ではあったが、ここでは芸術家・文化人と学校の生徒たちが互いに発展的な影響を与えることができる夢のような場所であった。イザドラの生徒たちと学校を訪問した芸術家・文化人の後の活躍<sup>(72)</sup>をみると、神聖なる舞踊教育の実践の場が当時の生徒たちや芸術家に与えた貢献は極めて大きく、その意味においてイザドラ・ダンカンが「芸術アカデミー」をフランスに創設したことは大変意義があったといえる。現在この建物は、フランス国立科学研究センターの会議室として使用され、「エスパス・イザドラ・ダンカン<sup>(73)</sup>」という名称が付されている。100年以上経った今日においても、イザドラ・ダンカンに対するオマージュがフランス国内で捧げられている証といえるのではないだろうか。



# 注

- (1) 柳下恵美「イザドラ・ダンカンの舞踊学校—最初に創設されたドイツの学校を中心に—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第3分冊、57号、2012年に記載。
- (2) 柳下恵美「ロシアにおけるイザドラ・ダンカンの舞踊学校—創設から閉鎖まで—」『多元文化』第6号、2017年に記載。
- (3) イザドラはこの学校をデュオニシオンと名付けていたと言われているが、筆者は生徒と芸術家・文化人との交流を教育の一環として行っていたため、あえて本稿では「芸術アカデミー」と記す。
- (4) ローウェンサルは、自らが学校の跡地を訪問した時の体験も交えてフランスの学校について記述しているが、詳細には至っていない。筆者はローウェンサルが使用していない新聞記事や史料を基に学校の内実についても明らかにすることを目的としている。
- (5) ローウェンサルほどの記述はされておらず、アラードは、著書の中で筆者が本稿で使用した新聞記事“Chez Isadora Duncan.” *Gil Blas* 22 Fev. 1914の記事の紹介に留まっている。
- (6) シンガー・ミシンで財を成したアイザック・メリット・シンガーの息子。当時、イザドラの恋人であった。
- (7) Splatt, p. 99.
- (8) 正式名はパイヤール・ベルヴュ・ホテル (Paillard-Bellevue Hotel)。
- (9) 既にパリに劇場を建てるという話もあったが、それは実現することなく、ベルヴュに舞踊学校を開設することになった。(Pour la danse, Isadora Duncan & Gordon Craig参照)
- (10) Bisch, Christian, *Meudon-Bellevue: Du château de la Marquise de Pompadour aux Laboratoires du CNRS, Centre National de la Recherche Scientifique*, 2000. (以下、CNRSと記す)
- (11) ホテルは1913年7月に経営を終了し、既に売り物件となっていた。
- (12) イザドラはこの代償として、自身がパリのボンチュール通りに所有していた1,460㎡の土地をシンガーに譲っている。CNRS, p. 29.
- (13) Duncan, Isadora. *My Life*, p. 299. *ML* 邦訳379頁。(My Lifeに関しては、以下MLと記し、邦訳についてはML邦訳と記す)
- (14) *ML*, p. 299. *ML* 邦訳379頁。
- (15) この建物は元々ルイ15世がボンパドゥール夫人のために建てたものであった。レストランの名はそれに由来している。CNRS, p. 5.
- (16) CNRS, p. 29.
- (17) “Isadora Duncan’s School.” *Daily Mail* 26 Juin 1914.
- (18) *ML*, pp. 299-300. *ML* 邦訳379-380頁。
- (19) ベルリン・プレスへの反論の際、イザドラは「踊るマイナデス」の像を例に挙げて自身の舞踊について語っていた。
- (20) *ML*, p. 300. *ML* 邦訳380頁。
- (21) “Isadora Duncan’s School.” *Daily Mail* 26 Juin 1914.
- (22) “Isadora Duncan’s School.” *Daily Mail* 26 Juin 1914.
- (23) パリス・シンガーのこと。イザドラは自伝で「ローエングリン」と記述している。
- (24) 合唱となっているが、原語ではChorusと記述されているため、古代ギリシア悲劇におけるコロスのことを指している。

- (25) *ML*, p. 303. *ML* 邦訳383-384頁。
- (26) “Chez Isadora Duncan.” *Gil Blas* 22 Fev. 1914.
- (27) *ML*, p. 299. *ML* 邦訳379頁。しかし、この人数が正確なものかは分からない。
- (28) “Isadora Duncan’s School.” *Daily Mail* 26 Juin, 1914.
- (29) Руднева, p. 165に掲載されているチラシには、ベルヴュの学校の生徒2人が踊るとの記述があるため、アナとイルマの事を指している可能性が高い。カースはこの6人の愛弟子の内の4人、イルマ、アナ、リザ、テレサはイザドラの兄オーガスティンとピアニストのヘナ・スキーンと共に4月にロシアに行き、ベルヴュの学校のための生徒を探していたと記述している。Kurth, p. 313. イルマの自伝によると、アナとイルマがオーガスティンと共にロシアに行ったと記述している。Duncan, Irma, p. 145
- (30) Руднева, p. 165
- (31) イザドラは1904年から何度もロシアで公演を行い、現地の文化人から賞賛されていたため。
- (32) “A Talk with One of the Duncan Girls.” *New York Tribune* 11 Apr. 1915. 第一次世界大戦中、アメリカに避難していた際、愛弟子の1人アナが新聞記者からのインタビューに答えている記事。
- (33) “Mme Isadora Duncan ouvre sa colonie de Bellevue.” *L’action* 7 Mar. 1914.
- (34) “New Cult Grips Paris.” *Washington Post* 19 Mar. 1914.
- (35) “Isadora Duncan’s School.” *Daily Mail* 26 Juin 1914.
- (36) “Theatres.” *Le temps* 12 Avril, 1914.
- (37) “America, The Haven of Classic Dancinc.” *Washington Herald* 29 Nov. 1914. 既にベルヴュの学校は閉校していたが、かつてのタイムスケジュールが掲載されていた。この新聞の見出しはDancingが正しい表記と思われるが、新聞にはDancincと記述されている。
- (38) *ML*, p. 300. *ML* 邦訳380頁。
- (39) *ML*, pp. 303-304. *ML* 邦訳384頁。
- (40) *The Touchstone Volume II, Number 1*, Mary Fanton Roberts, Inc. October, 1917, p. 4.
- (41) イタリア人彫刻家ロマーノ・ロマネッリとの子供。しかし、この子供は誕生直後に亡くなってしまう。
- (42) *ML*, p. 302. *ML* 邦訳383頁。
- (43) “Chez Isadora Duncan.” *Gil Blas* 22 Fev. 1914では3日間、*Le temps*では10日間ほどロダンが宿泊したことがあったとの情報が掲載されている。
- (44) “Chez Isadora Duncan.” *Gil Blas* 22 Juin 1914.
- (45) “A Talk with One of the Duncan Girls.” *New York Tribune* 11 Apr. 1915.
- (46) *New York Herald* 3 Jan. 1920.
- (47) カリフォルニア大学ロサンゼルス校の図書館にあるサイン帳 (Howard Holtzmann Collection on Isadora Duncan, Call number 1729, Box. 2, f. 10)
- (48) *The Touchstone Volume II, Number 1*, Mary Fanton Roberts, Inc. October, 1917, p. 4.
- (49) “Isadora Duncan’s School.” *Daily Mail* 26 Juin 1914.
- (50) “Chez Isadora Duncan.” *Gil Blas* 22 Fev. 1914.
- (51) *The Touchstone Volume II, Number 1*, Mary Fanton Roberts, Inc. October, 1917, p. 4.
- (52) “Chez Isadora Duncan.” *Gil Blas* 22 Fev. 1914.

- (53) *ML*, p. 300. *ML* 邦訳380頁。
- (54) 註24同様、原語ではChorusとなっており、古代ギリシア演劇におけるコロスのことを指している。
- (55) *ML*, p. 303. *ML* 邦訳383頁。
- (56) *ML*, pp. 300-301. *ML* 邦訳381頁。
- (57) ロダン美術館アーカイヴ所蔵のプログラム “Soiree organisée au bénéfice de l'école de danse de Bellevue par Isadora Duncan” Palais du Trocadero, 26 Juin 1914.
- (58) “Isadora Duncan's New Happiness.” *Chicago Daily Tribune* 5 Jul. 1914.
- (59) “Isadora Duncan's School.” *Daily Mail* 26 Juin 1914, “Isadora Duncan's New Happiness.” *Chicago Daily Tribune* 5 Jul. 1914.
- (60) この経験から戦争勃発後アメリカに渡った際、愛弟子たちのみで公演を行うという企画ができたのではないだろうか。
- (61) *ML*, pp. 300-301. *ML* 邦訳381頁。この公演プログラム “Soirée organisée par Isadora Duncan au bénéfice de l'école de danse de Bellevue” の最後にイザドラの記述した文章があるが、彼女の最後の文章は「決定的で神聖なその日が輝くとき、私たちはベートーヴェンの交響曲の崇高な賛美歌の全てを感じる」となっている。同内容の文が *The Art of the Dance*, p. 98、『芸術と回想』87頁に掲載されている。
- (62) ロダン美術館アーカイヴ所蔵プログラム “Matinée de gala fête de la danse” Jardins du ranelagh, 18 Juin 1914.
- (63) *Current*, p. 194.
- (64) ミュージック・ホールなど。
- (65) フラーの踊りはスカート踊りで曲芸的な点が観客にとって最も驚きをあたえるものであり、ザンペリは感情表現に優れた踊り手というよりは、彼女のテクニックがバリの観客にとって驚きであり、サハリ・ディジェリはエキゾチックなサロメ・ダンサーとして、ナタシャ・トゥルハノワはどのような経歴を持つダンサーか不明だが、サハリ・ディジェリ同様サロメ・ダンサーのような衣装を身に纏い踊っていた。
- (66) “Fire at Duncan Villa.” *New York Times* 16 Jul. 1914.
- (67) イザドラはこの戦争を重く受け止め、自らも従軍看護婦として従事していたことから、自らの意志で学校を軍の病院とすることに同意した可能性もある。“Brave American Women Going to Front as Nurses.” *The Austin American* 4 Aug. 1914.
- (68) この契約書が発行された1919年9月、イザドラは3週間のツアーのため、スイスに滞在しているので、この書類に目を通してサインをしていることが裏付けられる。*Timbrell*, p. 63.
- (69) “Isadora Duncan Sells Her Paris Property for \$200,000.” *New York Tribune* 4 Jan. 1920には200,000ドルで売却したことが記述されている。
- (70) *ML*, p. 300. *ML* 邦訳381頁。
- (71) *ML*, p. 309. *ML* 邦訳390-391頁。
- (72) その後の生徒たちの活躍については「ダンカン舞踊の継承と発展—イザドラブルズを中心に—」『演劇映像』54号、2013年に記載。この時交流した芸術家は後にイザドラたちの後援者となり、名を連ねている。
- (73) イザドラの姪りゴア・ダンカンは、2010年7月9日にエスパス・イザドラ・ダンカンの開会式典に招かれ、スピーチを行い、かつてイザドラがリゴアに歌い聞かせた子守歌を披露している。また、ダンカン・ダンサーのエリザベス・シュヴァルツ

## フランス（ベルヴェ）におけるイザドラ・ダンカンの「芸術アカデミー」

とキャスリーン・ガラントはこの建物の前でダンカン・ダンスを披露した。筆者は、この式典の様子を取めた映像をリゴアの家で鑑賞している。

### 【参考文献】

- Allard, Odette. *Isadora: La danseuse aux pieds nus ou La révolution Isadorienne d'Isadora Duncan a Malkovsky*. Paris: Éditions des Écrivains Associés, 1997.
- Bisch, Christian. *Meudon-Bellevue: Du château de la Marquise de Pompadour aux Laboratoires du CNRS*. Centre National de la Recherche Scientifique, 2000.
- Current, Richard Nelson, and Marcia Ewing Current, *Loie Fuller: Goddess of Light*. Boston: Northeastern UP, 1997.
- Divoire, Fernand. *Pour la Danse*. Paris: Éditions de la Danse, 1935.
- Duncan, Dorée, ed. *Life into Art: Isadora Duncan and her world*. New York: Norton, 1993.
- Duncan, Irma. *Duncan Dancer*. Middletown, CT: Wesleyan UP, 1966.
- Duncan, Isadora. *The Art of the Dance*. Ed. Sheldon Cheney. New York: Theatre Arts, 1928. (ダンカン、イザドラ著 シェルドン・チェニー編『芸術と回想』小倉重夫訳編、富山房、1977年。)
- Duncan, Isadora. *My Life*. New York: Liveright, 1955. (ダンカン、イザドラ『魂の燃ゆるままに』山川亜希子・山川紘矢訳、富山房、2004年。)
- Loewenthal, Lilian. *The Search for Isadora: The Legend & Legacy of Isadora Duncan*. Pennington, NJ: Princeton Book Company, 1993.
- Kurth, Peter. *Isadora: A Sensational Life*. New York: BackBayBooks, 2002.
- Splatt, Cynthia. *Isadora Duncan & Gordon Craig: The Prose & Poetry of Action*. San Francisco: The Book Club of California, 1988.
- Timbrell, Charles. *Prince of Virtuosos: A Life of Walter Rummel. American Pianist*. Lanham, MD: Scarecrow Press, 2004.
- Руднева, Степанида. *Воспоминания счастливого человека: Семеро пляшущих*. Москва: Издательство Главархива Москвы, 2007.

### 【雑誌】

The Touchstone Volume II, Number 1, Mary Fanton Roberts, Inc. October, 1917.

### 【公演プログラム】

- "Matinée de la gala fête de la danse" Jardins du ranelagh, 18 Juin 1914.
- "Soiree organisée au bénéfice de l'école de danse de Bellevue par Isadora Duncan" Palais du Trocadero, 26 Juin 1914.

### 【新聞記事】

- "Chez Isadora Duncan." *Gil Blas* 22 Fev. 1914.
- "Mme Isadora Duncan ouvre sa colonie de Bellevue." *L'action* 7 Mar. 1914.
- "New Cult Grips Paris." *Washington Post* 19 Mar. 1914.
- "A Talk with One of the Duncan Girls." *New York Tribune* 11 Apr. 1915.
- "Theatres." *Le temps* 12 Avr. 1914.
- "Chez Isadora Duncan." *Gil Blas* 22 Juin 1914.

“Isadora Duncan’s School.” *Daily Mail* 26 Juin 1914.  
 “Isadora Duncan’s New Happiness.” *Chicago Daily Tribune* 5 July 1914.  
 “Fire at Duncan Villa.” *New York Times* 16 Jul. 1914.  
 “Brave American Women Going to Front as Nurses.” *The Austin American* 4 Aug. 1914.  
 “America, The Haven of Classic Dancinc.” *Washington Herald* 29 Nov. 1914.  
*New York Herald* 3 Jan. 1920.  
 “Isadora Duncan Sells Her Paris Property for \$200,000.” *New York Tribune* 4 Jan. 1920

#### 【図版出典】

- 図 1. <http://paris-bise-art.blogspot.com/2016/12/meudon-bellevue-palace-hotel.html> (2018年11月21日閲覧)  
 図 2. Bisch, Christian. *Meudon-Bellevue: Du château de la Marquise de Pompadour aux Laboratoires du CNRS*. Meudon-Bellevue: Centre National de la Recherche Scientifique, 2000, p. 22.  
 図 3. Quinlan, Kathleen, ed. *Anna Duncan: In the Footsteps of Isadora*. Dansmuseet, 1995, p. 68.  
 図 4. Duncan, Dorée, ed. *Life into Art: Isadora Duncan and her world*. New York: Norton, 1993, p. 128.  
 図 5. 同上  
 図 6. “Ce que je pense de la danse par Isadora Duncan.” *Femina*, numero 317, 1 Avril 1914, p. 194.  
 図 7. 同上  
 図 8. Quinlan, Kathleen, ed. *Anna Duncan: In the Footsteps of Isadora*. Dansmuseet, 1995, p. 68.  
 図 9. Bnf Gallica より  
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b69303548.r=Loie%20Fuller%20ecole%201914?rk=21459;2>  
 (2018年11月26日閲覧)  
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b53126010k.r=jardins%20du%20Ranelagh?rk=21459;2>  
 (2018年11月26日閲覧)  
 図10. Bisch, Christian. *Meudon-Bellevue: Du château de la Marquise de Pompadour aux Laboratoires du CNRS*. Meudon-Bellevue: Centre National de la Recherche Scientifique, 2000, p. 28.  
 図11. Duncan, Dorée, ed. *Life into Art: Isadora Duncan and her world*. New York: Norton, 1993, p. 131.

#### 【後記】

本研究はJSPS 科研費13J04342及び17H04770の助成を受けたものです。

## Isadora Duncan's "The Academy of the Arts" in France (Bellevue): From Its Founding to Its Closure

YAGISHITA Emi

In this paper, I focus on a dance school regarded as "The Academy of the Arts," the school that was founded in France (Bellevue) by Isadora Duncan (1877-1927) in 1914. Although Duncan established dance schools in Germany and Russia as well, the details of the French school are less well known.

Prior to the school's inception, Isadora lost her two children in a tragic car accident, causing her to become depressed. Her lover, multi-millionaire Paris Singer, tried to restore her optimism by purchasing the Paillard Hotel near Paris, which was then transformed into Isadora's dance school. Due to the outbreak of the First World War, the school was turned into a military hospital, closing only six months after it had opened.

The school functioned, for a time, as the Academy of the Arts that Isadora had envisioned. Famous artists and cultural figures such as sculptor Auguste Rodin, painters George Barbier and Maurice Denis, poet Gabriele D'Annunzio, actress Cecile Sorel, actor Mounet-Sully, writer Anatole France, philosopher Henri-Louis Bergson, and Preston Sturges, who would later become a filmmaker, frequently visited and exchanged ideas. The students could meet the artists, and the artists were able to depict the dance students' movements.

I examine the school's structure, type of education, interactions with visiting artists and cultural figures, as well as the students' performances in comparison with other dance performances of the era.

My research is based on primary sources from the Musée Rodin Archives, Bibliothèque nationale de France, Centre national de la recherche scientifique, and the UCLA Library; historical periodicals in France and the United States; material in the possession of Isadora Duncan's relatives; Isadora Duncan's autobiography, *My Life*; and other related books.